

## 今週のメニュー

## ■トピックス

- ◇上田学園コレクション プレタポルテ2011  
ー塩ビ素材の新たな可能性を秘めた産学協同の試みー

## ■随想

- ◇古代ヤマトの遠景（56）ー【倭国の朝鮮半島との関り（4）】ー  
信越化学工業（株） 木下 清隆

## ■編集後記

## ■トピックス

- ◇上田学園コレクション プレタポルテ2011  
ー塩ビ素材の新たな可能性を秘めた産学協同の試みー

6月10日、11日に、第127回上田学園コレクションのプレタポルテ2011が大阪天保山海岸通現代美術ギャラリーCASOで開催されました。今回のテーマは「DEPARTUREーミライヲカナエルチカラー」で総数約300点が展示されました。アパレル企業、報道関係の方々や作品の公開審査と講評を行い、一般の方や高校生などが展示された作品とファッションショーを見学に来られる開かれたイベントです。



塩ビものづくりコンテストを開催するときに、デザイン関係の専門学校で作品を応募して頂こうと昨年末に声を掛けたことが縁で、指導の先生方とお話しをする機会が出来ました。塩ビ素材でもなにかコラボレーション出来ないかと考え、授業で使ってもらえないかと持ちかけたところ、既に取り組んでおられた産学協同の紹介を受けました。

その一例が今回のプレタポルテ2011でも展示されていることからお誘いを受けたのです。阪上織布(株)様（泉州で超高密度織物などの特長ある製品を扱っている）と上田安子服飾専門学校ファッション工芸デザイン学科がシューズ、バッグ、帽子、アクセサリ等のファッション雑貨を産学協同で商品提案しているものです。



軟質塩ビ素材に興味を持たれたファッションクリエイター学科も急遽作品に織り込む話があり、シートメーカーや西日本プラスチック製品加工協同組合の会員会社が協力して、素材の提供と加工の一部を手伝いました。当日、12の学生ブランドのひとつであるRe:TOYに、使用された作品が展示紹介されました。通常、軟質塩ビシートは高周波溶着を用いますが、製作までの時間が限られ、金型の製作に費用がかかることからミシン縫いをメインに裁縫されていました。中には、アイロンの熱で収縮させて立体感を持たせる工夫もあり、塩ビの透

明性と柔らかさがうまく表現されていました。

ファッション工芸デザイン学科の作品にも、シューズの表面に透明塩ビシートを用いて、楽譜や切手などをあしらったおしゃれなものもありました。シューズの多くは、入学して3ヶ月に満たない学生が製作したもので、その専門性と実用性を習得させる先生方の指導力に驚かされました。

2日目のスタイリングショーでは前述の学生ブランドが学生モデルによって紹介され、高校生初め集まった多くの方々が熱心に見入っていました。その中に、塩ビを用いた作品もあり、新しい可能性を感じました。

今回のプレタポルテ2011をきっかけにして、西日本プラスチック製品加工協同組合、関西ビニール卸協同組合、日本ビニール工業とともに、上田学園様と一緒に関西発の産学協同を立ち上げ、ファッション工芸デザイン学科長の言われる「足元はファッション、見て元気になるもの」を作り上げて頂くよう、支援していきたいと思っております。(了)

## ■ 随想

### ◇古代ヤマトの遠景（56）－【倭国の朝鮮半島との関り（4）】－

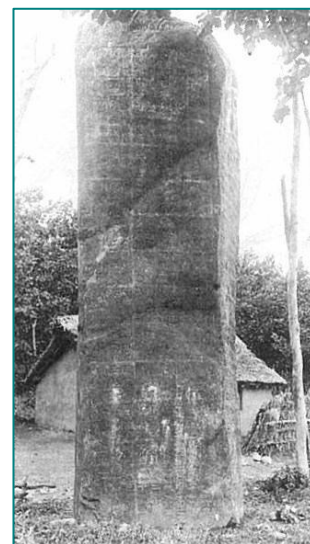
信越化学工業（株） 木下 清隆

#### <広開土王碑>（2）

##### 【百済の和通】

次は永樂九年（三九九）の百済の誓約破り問題である。百済が永樂六年（三九六）に高句麗に敗れ、永く奴客となりますと百済王が広開土王に誓ったにもかかわらず、この永樂九年に、倭と和通してこれを破った事件である。

ここの碑文の内容は甚だ簡単であるが、極めて重要な内容が隠されている。先ず百済が倭と和通したという事実を高句麗はどのようにして知ったのかである。これは単なる未確認情報として高句麗が察知したのではない。広開土王が王都の国内城から平壤へ動いている以上、極めて正確な情報を彼らは得ていることになる。考えられることは、倭国の兵が百済に入り、百済の兵と同盟して広開土王に抜かれた多くの城の幾つかを奪還したのではなかろうかということである。このような動きを高句麗が知ったのが永樂九年のことであった、ということである。高句麗はこのような同盟軍に敗れたのである。



廣開土王碑

ところがこの屈辱的な戦いについて碑文は全く触れていない。百済が倭と和通した事実を伝えながらその具体的な内容についてはこれを伏せ、前回に示したように、いきなりE、F項の新羅に援軍を出した話に切り替わるのである。ここには明らかに作為がある。百済の幾つかの城が取り返されたとする根拠は、碑文の最後にある主墓人リストからの推定であるが、その詳細についてはここでは省略する。

このような城の奪還と倭兵の活躍が事実とするなら、なぜ、倭国は兵を派遣したのかが次の大きな問題となる。本考での話の流れとしては、ここで七支刀にからむ倭と百済との軍事同盟が発動されたと考えたいところである。しかし、この同盟関係が両国で論議された当時、百済が第三国に降伏するといった事態が想定されていたのか、が問題となる。国が敗れるということは一般的にいて、同盟の当事国が存在しなくなることを意味している。高句麗による百済制圧で、百済王は、殺されはしなかったが、高句麗の管轄下にあったものと考えられる。碑文の中にある「奴客」の意味がこのような状況を表しているものといえよう。

このように考えると七支刀同盟は、破棄されたも同然だということになる。このような状況下で、倭国は兵を出したのである。何故か。ここに一つの重要な史料がある。それは、『三国史記』の「百済本紀」<sup>あか</sup>阿莘王六年条に

「夏五月、王、倭国と好を結び、太子腆支<sup>てんし</sup>を以って質となす。」

の記載があることである。『三国史記』とは一一四五年に高麗において編纂された、新羅・高句麗・百済の歴史書で、現存する最古の朝鮮の正史である。

阿莘王六年とは三九七年のこととされている。百済が高句麗に破れた翌年のことであるが、百済王は太子を人質に出して倭と好を結んだことが記されている。従来、この阿莘王六年条によって、倭国と百済との提携が始まったとの見方が強いが、人質を差し出されたぐらいで、国家的な大事業をいきなり進めたとするのは、普通では考えられないことである。もし、人質が契機になったとしても、準備に時間が掛かり実際の派兵はもっと遅くなるはずである。

ところが、倭国の決断と行動は極めて迅速なのである。この百済本紀の記述が正しいとするなら、三九七年の人質提供により正式に倭国は半島出兵を決断し、三九九年には万オ一ダーの大軍を百済に送り出したとみられる。二年足らずである。このような倭国の対応を見るかぎり、そこに何か事前の約束の存在を想定しない限り、説明がつかない。要するに、七支刀同盟は存在していたということである。

ではなぜ倭国は出兵したのか。恐らく、広開土王の即位以来、その矛先が百済に向けられることを予想した百済王は、七支刀同盟に基づき倭国へ支援要請をしていたとみられる。倭国は簡単には動かない。しかし、次々に百済からの情報が入ってくると、倭国も重い腰を上げ派兵の準備を始めたと思定される。

しかし、百済敗北の報が入ったとき、倭国内には混乱が生じたはずである。派兵すべきか否かである。これを知った百済王は最後のカードを切る。人質の提供である。これで倭国内の混乱は収まったのではなかろうか。倭国としては百済に少しでも力が残っているかぎり、これを支援して高句麗の南下を防ぐ、というのが基本的な政策だったと見られる。完全に百済が倒れたとき、加耶の安全確保は極めて困難となるからである。

(つづく)

※ 広開土王碑写真：白帝社 武田幸男著『広開土王碑との対話』掲載の京都大学人文科学研究所所蔵写真を転載。

前回：[「古代ヤマトの遠景」\(55\) - 【倭国の朝鮮半島との関り\(3\)】 -](#)

「古代ヤマトの遠景」：[バックナンバー](#)

## ■ 編集後記

いよいよ梅雨も中ごろ、蒸し暑い夏に向かっていきます。今般の震災により、この夏の電力需要抑制目標を15%とする政府の呼びかけが行われている中、大口需要家であるメーカーは25%削減など目標を掲げて取り組んでいるようですが、最近、家庭での削減の難しさを実感しています。我が家でも門灯を点けなかったりしてはみたものの、4月、5月の電力消費量は、昨年と比べ8%減にもなっていません。冷蔵庫を筆頭に電化製品は人が居ても居なくても電気を使うためでしょうか、就眠時間を早めるなど夜の生活パターンを変えない限り、難しそうです。(HI)

## ■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 東 幸次

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL [info@vec.gr.jp](mailto:info@vec.gr.jp)

---

---